

# 令和7年度全国学力・学習状況調査における

## 北九州市立 藤松 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、6年生を対象として、令和7年4月17日（木）に、「教科（国語、算数、理科）に関する調査」、文部科学省が指定した日（4月18日から4月30日の間）に「児童質問調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思っております。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

### 1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

### 2. 調査内容

- (1) 教科に関する調査（国語、算数、理科）

#### 教科に関する調査（国語、算数、理科）

- ① 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
- ② 知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等

※調査では、上記①と②を一体的に問うこととする。

- (2) 児童質問調査

#### 児童質問調査

- 学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

※本校の6年生については、単学級ですので個人が特定されないように公表の方法については、配慮しています。

### 3. 教科に関する調査結果の概要

#### (1) 全国・本市の学力調査（国語、算数、理科）の結果

本年度の結果	国語		算数		理科	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	8.9	64	8.6	54	9.1	53
全国	9.4	67	9.3	58	9.7	57

#### (2) 本校の学力調査結果の分析

国語	全体的な傾向や特徴など	話すこと・聞くことの領域で全国平均をやや上回り、書くことの領域で下回った。すべての問題で無答率が低く、粘り強く回答しようと努力したことがうかがわれる。
	よくできた問題	時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付くこと。
	努力が必要な問題	情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うこと。
算数	全体的な傾向や特徴など	各領域ともに、全国平均を下回った。ほぼすべての問題で無答率が低く、粘り強く回答しようと努力したことがうかがわれる。
	よくできた問題	数量の係数に着目し、知りたい数量の大きさの求め方を式や言葉を用いて記述すること。
	努力が必要な問題	分数の意味の説明や異分母の分数の計算、棒グラフから項目間の関係を読み取ること。
理科	全体的な傾向や特徴など	エネルギー、粒子の領域で全国平均と同等、生命、地球の領域で全国平均を下回った。すべての問題で無答率が低く、粘り強く回答しようと努力したことがうかがわれる。
	よくできた問題	身の回りの金属について、電気を通す物、磁石に引き付けられる物があることを理解すること。
	努力が必要な問題	花のつくりや受粉について理解すること。顕微鏡を操作し、適切な像にすること。

### 4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問調査結果の概要

質問調査の結果分析
<p>生活面では、「決まった時間に寝る・起きる」が全国平均を大きく上回った。「学校に行くのは楽しい」と答えた児童100%。「読書が好き」全国比+7P。「家庭での学習2時間以上」が全国比+18Pで、「1時間未満」は全国平均同等。</p> <p>学習面では、「授業でのタブレット活用が毎日複数回」が全国比2.3倍。「授業以外での学習にタブレット活用1時間以上」が全国比2倍。「国語・算数・理科の学習が好き」はすべて80%で、国・算は全国比+20P以上。「学級生活をよりよくするために話し合い、互いの意見のよさを生かして解決する」は全国比+10P。</p> <p>一方で、「朝食を食べている」全国比-10P。「自分にはよいところがある」全国比-10P。タブレットの活用において、「より楽しく学習する」、「自分のペースで学習する」、「情報を整理する」、「分からないことをすぐに調べる」、「分かりやすく伝える」などができているかについて、いずれも全国平均を下回る傾向が見られた。</p> <p>以上から、生活・学習習慣は概ね良好であり、学習への関心・意欲も高く、特にタブレットをよく活用していると言える。活用能力も高まっているのだが、児童にとってはそれが普通で、特別によくできている自覚がないのではないかと考える。</p>

### 5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

#### ① 教科に関する取組

算数・理科では、思考・判断・表現よりも知識・技能の観点で全国平均を下回ったため、基本的な内容の定着を目指してAIドリルでの反復練習などに取り組む。自ら課題や方法を設定・選択して追究したり、意見を交流したりするタブレットの活用については、学び方や成果についてフィードバックし、自他の高まりを自覚できるようにする。

#### ② 家庭生活習慣等に関する取組

小中一貫の生活ルールと学習ルールを設定しているが、学力調査や児童・保護者アンケートの結果をもとに振り返りを行い、学校運営協議会での意見も踏まえて「そろえる・つなげる中学校区の取組」の修正・発展に生かす。